外国人として生きる

「非日本」的なところより「プラスワン」を大切に

金 美善（キム ミソン）
本館外来研究員

故郷と祖国

パクキョンオク（朴敬玉）さん。一九八八年、在日コリアン四世として日本でもっとも在日コリアンの多い大阪市生野区に生まれ、ずっとそこで育った。生粋の生野っ子、と冗談を飛ばし自己紹介する小柄で笑顔の可愛い彼女だが、ちょっと不釣り合いなたくましさも漂う。

現在関西大学二回生に在学中の彼女が小学校から高校まで通ったのは朝鮮学校だった。両親と姉も小学校から高校まで朝鮮学校だったが、四人とも通った学校はすべて同じ、つまり先輩後輩の関係なのだ。キョンオクさんの曾祖父母は韓国の済州島出身だが、心を寄せる祖国はずっと北朝鮮と決めてきた。彼女には済州島にも北朝鮮にも親戚がいる。一世が国に残した親戚と帰国事業で北朝鮮に渡った親戚である。済州島の親戚には一度もあったことがないが、北朝鮮の親戚には、高校の修学旅行に行った際会ったことがある。初めて会った親戚が彼女の顔を見て泣き出し、彼女も涙が出たという。それを聞いてわたしも思わずもらい泣きしそうになった。そもそも、故郷と生活する国が異なって当たり前の在日コリアンであるが、さらに祖国が異なることを心に秘めてきた緊張感で、少しの刺激にも感情がもろくなってしまうのである。

民族学校とウリマル

低年齢の子どもの場合、学校の選択は、通常、親世代の意思が決定権をもつが、彼女が朝鮮学校に通ったのも、親の意思であった。朝鮮学校は設立をめぐり日本社会といろんな面で衝突し、その後も、民族差別の大海のなかで孤島のように、朝鮮民族のシンボル的存在を堅持してきた。そんな民族学校に彼女や彼女の親が求めていたのは何だったのだろう。キョンオクさんにとって民族学校は、「胸を張って自分が自分であることが可能な場」であったという。朝鮮学校は彼女たちにとって、多文化の概念がなかった日本社会において癒しの場でもあり、解放された民族空間でもあった。その面で朝鮮学校は異国民としてくらす彼女たちの疎外感に家庭、社会、国が凝縮されたマルチ空間を提供してくれたかもしれない。

彼女は民族学校で、自分と自分の存在の証しである名前を隠さず生活できたことに誇りをもっている。なかでも彼女にとって財産となったのは、日本語と朝鮮語のバイリンガル能力であった。朝鮮学校ではウリマル（朝鮮語）教育を民族教育の核心として取り入れ、日本語以外の授業はすべてが朝鮮語でおこなわれた。先生も全員朝鮮語が話せるバイリンガルである。そのような教育をうけたためか、在日コリアンの多くが日本語のみを使っている今、彼女は、四世でありながら、朝鮮語ネイティブであるわたしの朝鮮語の不注意さを指摘できるほど、立派な朝鮮語能力をもっていた。

それでも彼女自身、いちばん使い易いのは日本語だという。同じく朝鮮学校出身の家族や友達との会話も日本語になる場合が多いのだ。朝鮮語の能力に問題はないが今は大学で朝鮮語の授業をとっている。レベルは合わないができるだけ朝鮮語と接していたいからである。かつては朝鮮学校を卒業しても朝鮮語を続ける場はあまりなかったが、最近は韓流ドラマがいい刺激になっている。学校で習った硬い朝鮮語に比べ、日常生活の生身の朝鮮語が聞ける機会が増えたことを、彼女は嬉しく思っている。

大学生活とこれから

大学は彼女にとって初めて接する日本の学校空間である。経済学を専攻し、テニスのサークルに属している。バイトやサークルで忙しい毎日を過ごすのも他の大学生と変わらない。パクキョンオクという名前からか最初は留学生と思われ、日本語の不自由さを心配されたりしたこともある。在日コリアンの多くが通名を使い、本名を使うことにあまりなれていない日本人にとって、本名は新しく来日したコリアンを連想させるらしい。やがて、会話のなかで友達はすぐに彼女が彼らとあまり変わりのない日本の若者であることに気付いてくれるが、在日コリアンのことがまだあまり知られていないのを残念に思っている。

みんなと同様に、日本に生まれ日本に生活しているにもかかわらず、いちいち説明しなければいけないのは煩わしい。彼女にとって在日であることは「非日本」的なことではない。朝鮮的要素は、みんなと同じ日常の存在への「プラスワン」なのである。

それでもわたしは彼女に限りなく「非日本人」らしさを求めていたのだが、彼女はありふれた日本の若者であった。ことばやしぐさから、ファッションなど最新の流行感覚にいたるまで。

卒業後のことについて聞いてみた。普通の会社に就職するという。日本社会で資産的価値がかつてより向上している朝鮮語を特に生かせる職業を選んだりする気はあまりないらしい。しかし、国籍にはこだわりたいという。数年前に朝鮮籍から韓国籍に変えたが、日本国籍をとることには違和感があるようである。

「日本は好き？」、日本に生活する外国人に会うとよく聞く質問である。最後に彼女にも投げかけてみたかったが、踏みとどまった。よく考えてみれば、わたしも在日外国人である。その質問をわたしにむけたら、どう答えるのだろうか。

小さいころ、家の前で姉と。行事があるときにはよくチマチョゴリを着ていた

修学旅行で北朝鮮へ行ったとき、ピョンヤンの中学生たちと。朝鮮語で交流が出来たことが嬉しかった（中央）

サークルの合宿で友だちと（右）

大学のサークル活動。頑張れば頑張るほど楽しい時間である

今年、成人式を迎えた。民族団体が用意してくれた会場で両親と一緒に